

日本学術会議  
情報学委員会国際サイエンスデータ分科会 CODATA 小委員会  
(第 26 期・第 2 回)  
議事要旨

日時: 令和 6 年 12 月 2 日(月) 13:00-15:00

場所: オンライン

議題:

1. 10 月開催の CODATA EC 報告
2. 平成 7 年度代表派遣について
3. 次回 CODATA 総会における選挙について
4. その他

資料:

1. Draft agenda for the face-to-face CODATA Executive Committee meeting
2. 公文\_代表派遣推薦依頼
3. 別添 1\_加入国際学術団体に関する調査票(CODATA)

出席者(敬称略): 井上 純哉、中西 友子、宮崎 久美子、村山 泰啓、芦野 俊宏、  
岩田 修一、大武 美保子、門平 卓也、中島 律子、藤井 賢一、船守 美穂

議事:

議題 1. 2024 年 10 月開催の CODATA EC 報告(芦野委員長)

- 2024 年 10 月 30、31 両日バルセロナ、Polytechnic University of Catalonia (UPC)に設置されている Barcelona Supercomputing Center (BSC)において対面での CODATA EC が開催された。
- それに先立って 10 月 28、29 両日には BSC、CODATA、Fundació La Caixa (ラ・カイヤ財団) の共催によりシンポジウム “Computational Social Science Conference: innovative methods, research workflows and data stewardship” が開催された。
- 28 日は社会システム等社会科学に関わる計算・データ活用に関わる講演が中心であったが、29 日は FAIR 原則、メタデータといったデータ共有全般に関わる講演が中心であった。
- 30、31 の EC については、CODATA 役員、EC メンバーに加えて CODATA 事務局スタッフ、ISC (International Science Council)より 1 名の出席があった。WorldFAIR+と IDPC (International Data Policy Committee)の活動、ISC の戦略への協力等につき、全体への活動報告の後 4-6 グループに分かれてそれぞれ

が議論をして全体に報告するという形式をとった。

- WorldFAIR+の分野別に関連する国際機関との連携、IDPCのドキュメント作成、IDPCとUNESCOによるData Policy in Times of Crisis (DPTC)のアウトプット、ISCとの連携については、“AI for Science”に関わるデータの問題についての検討などが挙げられた。また、加盟国、加盟機関の拡大、そのための広報活動や連携について議論を行った。これら各項目について担当メンバーの割り当てが行われた。
- 特筆すべき活動として、IDPCがUNESCOと行っているDPTC (Data Policy for Times of Crisis)が挙げられた。IDPCは先日の再編によって規模が大きくなり、最終の報告書作成に向けてトピック毎のスレッドを立てられたが、CODATAとしての方針がはっきりせず、新規に加わった委員が多いこと、オンラインでの会合のみであるため議論の進まないスレッドがある。
- 運用面の問題として、時差があるため同じ内容を東西半球の時間帯に合わせて同じ議題の会合を2回行っているが、東側に合わせた時間帯は日本の業務時間になるためより優先すべき会合などと重なって出席が難しく、会合の参加者も
- IDPCの委員長はDPTCに加えて、EUが組織しているCoARA (Coalition for Advancing Research Assessment)のWorking Groupに注力しているように思われ、目標設定が曖昧になっている。
- 今回ECでは、TG DRUM (Task Group Digital Representation for Units of Measures) などについては話題にならず、CODATAの方向性が以前とは変わってきているという印象である。
- 新しい会長はBSCのComputational Social Scienceのトップであり、CODATAの社会科学的な分野における活動を活性化する方向と思われる。社会科学と自然科学ではデータの粒度が大きく違い、社会科学ではかなりラフなデータからの大局的な予想をするといったところがあるが、そういった議論はなされているかという質問があったが、現在のECではデータの内容などについての議論はほとんど行われず、具体的な内容についてはそれぞれのTask Groupがそれぞれの分野で議論を進めている状態であると説明があった。
- AI for Scienceに関わる課題について具体的な個別の議論はあまりなされておらず、ISCの取組にデータという側面、データの品質、データの出自の問題などについてどのように国際的な議論を進めていくかというような議論が中心であった。
- 世界的にデータというものが注目されるに伴って古くからデータについて議論している国際委員会としてのCODATAはどのような位置づけで議論をしようとしているのか分り難い。
- WDS設立の際に、ICSU内でWDC、FAGS、CODATAの役割が議論されたが、WDSは

データリポジトリの連携組織、CODATA は各国のメンバーからなる委員会という位置づけになった。それ以前に ICSU と距離を置いている時期もあったが、ISC のデータ委員会として ISC の資金を得て国際的な活動のコーディネイトするような活動が主となってきているために、CODATA として具体的に分野横断的な活動をするといった方向にはなっていない。

- 国連の情報サミットなどをきっかけとして ISC などデータの問題について議論しなくてはならなくなり、CODATA と協力してそのような活動を進めるということになって来た。UNESCO とは折に触れて途上国に関する問題などで協力してきたのであって最近のことではない。
- UNESCO とはかつてサステナビリティ・サイエンス等について協力関係があった。
- アメリカの変化に対応する必要がある。また、AI の変化・進歩が非常に早く、正しい答えを出すわけでもないし扱う人間に合わせた答えを出すような場合もあるので、どのようなデータを共有すべきか、科学的な部分で正しいデータという線をどこに引くかといったことを言っていくべき。
- UNESCO についてはアメリカが一時脱退するなどしたので国際的にどのように働きかけてゆくべきかの判断が難しいが、文科省の国際統括官などを通じて働きかけてゆくべきであろう。芦野委員長には引き続き EC に出て頂きたい。
- CODATA の従来からの活動である TGFC (Task Group for Fundamental Constants)などを継続して行うが、データに関わる状況が変わってゆくことに対応して直近の課題としては AI がクローズアップされている。毎回総会においてタスクグループが採択されるが、一方で活動の低調なタスクグループも散見される
- WDS は分野別、CODATA は国別となると、各分野については研究者コミュニティが存在してデータに関わる課題・問題について議論することが出来るが、国別ということであると課題やコミュニティが明確にならず、活動が進まないのではないか。
- 日本の体制として、CODATA 小委員会は CODATA に対しては National Committee という位置づけであるが国内的には日本学術会議の一つの小委員会であるため独自の活動が出来ない。海外では例えばニュージーランドの National Committee (NC) が独自の活動を通じて多くの分野の専門家の意見を集約することなど出来ているようであり、CODATA でも National Committee Forum を作って各 NC の代表を集めて会議などをやっている。
- 2024 年から International Unions Forum として ISC に加盟している国際学術連合組織の代表を集めてデータに関わる議論をしようとしているがなかなかうまく進んでいない。

- 我が国でも初期のころは国としてデータの輸入国になってゆく危険があるので積極的に関与すべきということで国研などの関与はあった時期もあるが、現在は途上国が国として国威発揚や国としてのプロジェクト立ち上げなどのために CODATA などを利用しようとする傾向がある。国としてどういう方向を目指すかに合わせて ISC や CODATA を活用すべき。
- NC がしっかり活動していると思われるのはカナダやオーストラリア、ヨーロッパでは最近オーストリアがある。カナダやオーストラリアはそれぞれ NRC (National Research Council) や CSIRO (Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization) と連携して定期的に役員などを出してきている。
- 中国は国内外向けの権威付けなどもあり熱心で予算や人もつけている。また、ノルウェーも最近加盟したが、近年はデータの重要性が認識されるにつれて徐々に加盟国が増えており、これらオーストリアなど近年になって加盟した国は国内での NC の組織もしっかりしているように思われる。ロシアなど古くからの加盟国については属人的になっていて、CODATA が物理化学などのデータを扱う専門家の集まりであったところにそれらの分野においてデータの問題に意識のある方が出ていたということではないか。これがデータの問題がクローズアップされてデータポリシーなどの議論に範囲が広がって加盟した国は国として体制を作っている感があり、日本はその移行がうまく出来ていないように思われる。
- 国別の委員会という位置づけであれば分野横断的な問題について議論すべきで、データに関する権利の問題、データ作成への貢献、データの帰属や産学連携での取り扱い、研究者の国際的な異動に当たってのデータの問題などについての考え方などが整理されていない。日本の研究機関などでも機関としてのデータポリシーが存在しない場合、海外からの研究者受け入れなどに当たって機関がデータを受け入れる上での支障となる場合がある。
- このために IDPC においてデータポリシーの国際的なガイドラインを作ろうという方向性は正しいが、具体的な課題や対象者が明確ではないため議論が進まない。DPTC のようなものは外部にイニシアティブがあってそこに CODATA が協力しているという形。
- かつて、ゲノムのデータ公開に当たって CODATA や日本の CODATA が国際的に主導的な役割を果たしたことがあったが、米国内での集中的な議論を受けてのものであったと思われ、IT 化によってデータの議論が多様化・多極化しつつある現代では難しくなっている。

## 議題 2. 平成 7 年度代表派遣について

- 引き続き 10 月の総会への対応に関連して 1 月 6 日が締め切りとなる日本学術会議の代表派遣申請についての議論を行った。
- 前回(2023 年・オーストリア)総会の際には井上副委員長を代表として派遣申請を行い、認められたが、大武委員が新規タスクグループの申請を行い、総会において採択投票があること、井上副委員長が業務のため対面での参加が困難であることなどから大武委員に派遣者を切り替えて派遣を行った。
- これについて大武委員より、前回総会において採択されたタスクグループの成果報告、総会と同時に行われる SciDataCon2025 においてタスクグループのセッションを組織する可能性があることなどから対面出席したいという申し出があり、今回も大武委員を代表として派遣申請を行うこととなった。
- IDPC に参加している船守委員より、関連する活動としてオーストラリアでは ARDC (Australian Research Data Commons) を中心に、研究データ面の研究環境の整備が進み、研究データの公開・共有だけでなく、各大学において 100PB 級のストレージを用意し、AI 研究が多様な分野で取り組み可能としたり、RSE (Research Software Engineer) を数十名大学に配備し、各研究者の研究プロジェクトの支援に当たらせていたりしており、個々の研究者・大学レベルがそのようなインフラを用意しなくてはならない我が国と比較して大きく進んでいるという指摘があった。なお、このような活動に関わる国際会議 eResearch Australasia 2025 が、上述の SciDataCon2025 の翌週に同じビリスベンにて開催予定で、日本の大学にも参加を呼びかけている。

## 議題 3. 次回 CODATA 総会における選挙について(芦野委員長)

- 2025 年 10 月に行われる総会での選挙において役員・EC メンバー候補を立てるかどうかをエントリー締め切りまでに決める必要がある。
- 芦野委員長から、既に CODATA Executive Committee (EC) メンバーを 3 期 7 年間務めており、時間や予算の問題もあるところから次回選挙に出る意思はなく、他に適任者を探して頂くか日本からの候補者は出さないことにしたいとの見解が述べられた。
- これに対して、特に具体的な候補者は挙げられず、我が国から EC にメンバーがいないというのは望ましくなく、旅費が問題であればオンライン出席ではどうであるかといった意見が出された。
- CODATA の活動については事務作業や予算など個人が手弁当で行わなくてはならない状況であり、継続は困難であるとのことであり、例年 6、7 月になるエントリー締め切りに向けて議論を継続することとなった。

#### 議題 4. その他

- 今回の EC ではタスクグループのレビューなどは行われなかった。
- 大武委員が Char している Data driven social change towards society promoting cognitively healthy aging について、活動が進んでいない状況であり、次の総会に向けてワークショップなどを検討するとのことであった。
- オンラインの EC においてタスクグループの議論が行われているが、EC のリエゾンからはどのような体制で誰が責任をもって運営しているか分からないというコメントがあった。
- タスクグループには、リエゾンと相談するようという連絡があったが、連絡が出来ておらず、メンバーを集めて Chair、Secretary などを決めたが、具体的にどのような活動をするかを明確に出来ておらず、活動が進んでいない。
- 芦野がリエゾンを務める TGFC や DRUM は着実に活動しているが、他のタスクグループの中にはあまり活発に活動しているとは思えないところもある。
- CODATA に関わる国内のコミュニティを広げる必要があるのではないかと。広報・啓発活動なども必要であろうが、出来るところは協力したい。また、CODATA に関する情報があっても具体的にどのような参加の仕方があるのかが分からないのではないかと。
- 第 26 期日本学術会議加入国際団体の調査票を記入して提出した。事前に小委員会に諮る時間がなかったが、お配りするのでご確認いただきたい。この調査票に基づいて今後も会員を継続するのかどうかについて国際委員会において審議されることになる。また、広報用のスライドについてはまだアップデートが出来ていないので早急にアップデートする必要がある。
- TGFC は毎年 9 月に会議が行われ、CODATA2022 推奨値を決める作業が進められている。これは 2022 年 12 月にデータを締め切って評価を継続している。かつてはデータを締め切るとすぐに NIST から推奨値が発表されたが、今回はデータの扱い、アメリカと他の国の意見の相違などが多く、議論が行われて公開が遅れた。値そのものは NIST の Web ページに公開されているが、論文は完成して査読中。arXiv.org には公開されている。
- 手弁当で国際学術組織の活動を行っている状況では、今後継続的に寄与してゆくことが難しくなると思われるが、更に状況が厳しくなることは確実であり、何らかの手立てをする必要がある。

以上